

J. シベリウス Jean Sibelius (1865-1957) 交響曲第 1 番 ホ短調 作品 39
Symphony No. 1 in e minor Op. 39 (1899)

グリーグがノルウェーで最も偉大な作曲家であるとされるように、シベリウスはフィンランドで最も偉大な作曲家と称えられている。この偉大な作曲家二人の共通点として挙げられるのは、作曲技法やアイディアの豊かさは言わずもがな、やはり、祖国への感情と貢献と言えるだろう。フィンランドも、ノルウェーと同じく、14 世紀から 20 世紀初頭までは大国の支配下にある国であった。この二人が、それぞれの祖国の民の民族的自覚を高めたことは、ノルウェーとフィンランドの独立の要因の一つであるといえよう。

シベリウスが〈交響曲第 1 番〉を作曲したのは彼がまだ若干 34 歳の頃である。しかし、彼の強固な民族意識の反映された創作の多くは、1890 年代にすでにフィン人から強い支持を得ていた。作品としての完成度も非常に高かった〈交響曲第 1 番〉は、大きく歓迎された。次いで同年に有名な〈交響詩「フィンランディア」〉作品 26 が発表され、シベリウスはフィンランドの最も偉大な作曲家としての地位を確固たるものとしていった。

第 1 楽章 歩くような速さで、しかし甚だしくなく－快活に、活力を持って ホ短調 2 分の 2 拍子－4 分の 6 拍子

3 つの主題を持つソナタ形式の第 1 楽章は、ティンパニのロ音（属音）による持続低音を伴う、クラリネットの独白による序奏によって始まる。半音階的な旋律の動きによって、徐々に主調のホ短調へと転調し、弦楽器の勢いの良いトレモロによって呈示部へと移る。第 1 ヴァイオリンによって、決然と呈示される第 1 主題は、導音の半音上行が無い自然短音階によるものなので、非常に明るく響く。第 1 主題呈示部において、シベリウスはフィンランドの自然の雄大さを讃美するかのような、非常にロマン派的な一つのクライマックスを作った。まるで妖精が踊っている様子を描写したかのような第 2 主題は、関係調の嬰ハ短調で、フルートによって呈示される。第 2 主題の確保ののちに、嬰ハ短調に転調し、持続的なシンコペーションの弦楽器の伴奏に乗ってオーボエが第 3 主題を奏する。第 2 主題のマテリアルの反復によって音楽は高潮し、弦楽器によるロ音のピチカートが三度打ち鳴らされ、呈示部を閉じる。ロ長調で始まる展開部は金管楽器

のコラールを伴い、華々しい様相を呈している。次いで、第3主題を変奏した嬰ト短調の極めて美しい旋律がソロ・ヴァイオリンによって奏でられる。ここからは、第2主題が複雑に変奏され、半音階法の中で組み合わされて進行する。第1主題呈示部に現れたマテリアルを用いて、音楽は高められ、クライマックスにおいて、第1主題が再現される。次いで第3主題、そして第2主題が再現され、再びコラールが挿入されると、緊迫した雰囲気の中で、決然と楽章を閉じる。

第2楽章 歩くような速さで（しかし遅くなり過ぎることなく） 変ホ長調 2分の2拍子

第2楽章はこの交響曲において、最もユニークな構成を取っている。まず、変ホ長調という、主調から遠く離れた調性を採用している点が挙げられる。そして、形式においては先行研究の中で様々な説があり、定まった結論は出ていない。三部形式論、ロンド形式論、変奏曲論が主な論説だが、これらの形式に共通しているのはどれもA部及び主題部に当たる部分の持つ役割が大きい形式であるということである。ここでは、主題部が循環するように、少しずつ変奏されながら複数回現れる、ロンド風変奏曲として解釈する。

まるで歌い言葉のようなフレーズによる第2楽章の主題は、ホルンとハープ、コントラバスによる持続低音を伴い、第1ヴァイオリンとチェロによって呈示される。この主題はコラール風に展開し、そして小さなフーガへと変奏される。このフーガの中で旋律は細分化される。そしてこの細分化された旋律は同時に、第2楽章後半で大きな役割を持つマテリアルとしても呈示されている。そして音楽が盛り上がりを見せたのちに、「極めて穏やかに *Molto tranquillo*」の指示で、ホルンが（副主題とも解釈しうる）旋律を奏する。そして、ここから主題はテンポも含め、様々に変奏される。フーガへの変奏の中に現れた、細かい動きのマテリアルが随所に響く中、クライマックスを迎えると、音楽は沈静化し、遠くへ去っていくように、静かに楽章を閉じる。

第3楽章 スケルツォ：快活に – トリオ：遅く（しかし甚だしくなく） ハ長調 4分の3拍子

第3楽章は大まかな形式としては単純なAB（トリオ）A'の複合三部形式のス

ケルツォ楽章である。しかし、この楽章には非常に複雑なリズムと調性の構造がある。エネルギーに満ち溢れた荒々しいリズム、また多くの転調や不確定的な調性感が楽章を支配している。楽章の始まりに、まずティンパニが主題を強奏で奏する。この楽章の A 及び A' 部分ではティンパニが旋律を取ることが多い、非常に珍しく、また効果的なオーケストレーションが施されている。続いて、ヘミオラやポリリズム、フーガ風の旋律を用い、A 部は展開される。そして、勢いの衰えぬまま突然にトリオに移行する。トリオでは、ホルンが朗らかに歌い、それを受けてフルートが高らかに歌う。A 部とは対照的に穏やかで優しい印象を与える。また、その後に続く部分で第 1 楽章第 2 主題に似たマテリアルが挿入されていることは非常に興味深い。そして再びスケルツォに戻り、楽章を結ぶ。

第 4 楽章 フィナーレ (ほとんど幻想曲のように) : 歩くような速さで - 極めて快活に ホ短調 2 分の 2 拍子 - 4 分の 2 拍子

第 4 楽章は 49 小節の序奏を伴う、楽章のタイトルが示すように、自由な形式の幻想曲風、交響詩風の楽章である。また、この楽章では、これまでの楽章であまり表立って用いてこなかった、直接的な不協和音を随所に配置していることが大きな特徴であると言える。ロ短調の序奏部では、第 1 楽章の序奏部でクラリネットが奏した旋律を、弦楽器が情熱的に奏する。その旋律を木管楽器が受け、徐々に主部へと移る。主部の第 1 主題はシンコペーションのリズムによる、エネルギーに満ちた短いものである。この主題はリズムとその短さという特徴から、この楽章中で様々な形に展開されて登場する。そして、ロ短調の第 1 主題部が閉じると、第 1 楽章第 3 主題呈示部と同じように、シンコペーションのリズムによる伴奏を伴い、ヴァイオリンが、極めて美しいハ長調の第 2 主題を歌い上げる。再び第 1 主題による部分に戻る。この部分では、常に 16 分音符の細かい動きによるマテリアルが響き続けている。そして、半ば狂騒的な展開の中で、第 1 主題による部分を閉じ、木管楽器による第 2 主題の再現部への推移部が奏され、ロ長調で第 2 主題部が再現される。ここではさらに強い感情を持って旋律が奏される。そして、主調であるホ短調へと回帰し、金管楽器によるコラールも加わり、交響曲全体のクライマックスを迎える。その後に続く部分は短く切り詰められているが故に、緊張感を保ったまま、弦楽器のピチカートによって作品を閉じる。

シベリウスの交響曲は第 1 番から第 7 番まで、それぞれに違う、素晴らしい個性を持っている。〈交響曲第 1 番〉は、伝統的な形式を大きく逸脱することにはなかったが、その確固とした既存の形式の中で、フィンランドの風土を思わせる楽想が、非常に生き生きとした形で現れている。彼の若書きの交響曲でありながら、〈交響曲第 1 番〉は傑作であると言って差し支えないだろう。

©Kaoru Shirai, 2017.